

中学校教師への信頼感が他者軽視傾向ならびに自尊感情に及ぼす影響

－回想法に基づく検討－

稲垣 勉 [鹿児島大学教育学系 (教育心理学)]

澄川 采加 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

The effect of trust in junior high school teachers on self-esteem and undervaluing others: An examination based on retrospective study

INAGAKI Tsutomu and SUMIGAWA Ayaka

キーワード：中学生、信頼感、他者軽視傾向、自尊感情、回想法

問題と目的

「自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚 (速水・木野・高木, 2004, p.1)」と定義される仮想的有能感という概念がある。仮想的有能感は近年の若者の特徴を示す概念であり (速水, 2006), 他者軽視を通して無意識のうちに真実でない仮想的な有能感を得ようとするという潜在的なプロセスを含むとされる (小塩・西野・速水, 2009)。すなわち、仮想的有能感は本人にとって意識可能なものとは限らず、他者軽視という他者認知傾向の裏側に隠された自己認知傾向とされる (速水・木野・高木, 2005)。こうしたことから、仮想的有能感の測定には他者軽視傾向を測定する 11 項目からなる尺度

(Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004) が使用されている。以降、本稿では概念の名称として仮想的有能感という語を、他者軽視傾向尺度を用いて測定するものを他者軽視傾向と表記する。

この仮想的有能感という概念が提唱されて 15 年以上が経過し、その間に多くの知見が報告されてきた。たとえば、高校生において他者軽視傾向は身体的いじめ、言語的いじめ、間接的いじめの加害経験・被害経験の両者と正の相関があり、他者軽視傾向の高さはいじめの加害経験のみならず被害経験の高さと関係があることが示されている (松本・山本・速水, 2009)。その他にも、他者軽視傾向は妬ましい他者を引き摺り下ろそうとする悪性妬み (稲垣・澄川, 2019) や孤独感 (藤井・山本・伊藤, 2013), 抑うつ・不安 (藤井, 2014a), 愛着スタイルにおける見捨てられ不安 (藤井・上淵・利根川・上淵・山田, 2010; 島, 2012) や親密性の回避 (島, 2012) などと正の相関を示すことが報告されている。加えて、他者軽視傾向は友人関係満足度と負の相関がある (速水他, 2004; 澄川・稲垣・島, 2020), 日常的な抑うつ感情、敵意感情の経験と正の相関がある (小平・小塩・速水, 2007) など、対人関係においてネガティブな結果と結びつきやすいことが示されている。以上を踏まえれば、他者軽視傾向を低減する要因の検討が望まれる。

では、こうした他者軽視傾向に影響を及ぼす要因はどのようなものがあるだろうか。この点に関して、松本・速水・山本(2013)の研究は一つの示唆を与えている。松本他(2013)では、高校生およびその担任教師を対象とした調査を行い、他者軽視傾向の減少には、担任教師による生徒理解(長所を伸ばす、適した役割を与えるなどパーソナリティを理解した上での対応)が有益であることが示されている。こうした関わりをしている教師は、当該の生徒との信頼関係も適切に構築できていると推察される。また、中井・庄司(2008)は、信頼感について、思春期に子どもが教師との間に結んだ信頼感は、その子どもの将来のパーソナリティにも影響を及ぼすと述べている。

これらを踏まえ、本研究では信頼感に注目し、中学校時代の教師に対する信頼感が、その後の他者軽視傾向に及ぼす影響について、回想法を用いた検討を行う。小学校から中学校への移行期は、個人を取り巻く環境が大きく変化し、学校システムの変化、対人関係の変化など新たな環境への対処を迫られることから、適応の危機であることが指摘されている(三浦, 2003; 永作・新井, 2006)。学校基本調査などにおいても、「不登校」をはじめ学校生活に関わる諸問題が小学校から中学校への移行後に急増することが示されている(中井・庄司, 2008)。こうした、いわゆる「中1ギャップ」を考慮すれば、小学校から中学校に移行した直後である中学校1年生の担任教員の影響は大きく、その後の人格形成にも影響し得ると考えたため、想起対象として取り上げることとした。

なお、本研究では上記に加えて、自尊感情も取り上げることとする。自尊感情は自己に対する肯定的または否定的な態度(Rosenberg, 1965)であり、自尊感情の高さは抑うつ・不安、孤独感などのネガティブな感情とは負の相関がある(藤井, 2013a, 2014b)一方、人生に対する満足感といったポジティブな感情とは正の相関がある(伊藤・小玉, 2005)といった報告がある。また、自殺念慮と負の相関がある(稲垣(藤井)・大浦・松尾・島・福井, 2017)など、種々の先行研究において心理的健康に関わる諸指標と関連することが繰り返し示されている。こうした点を考慮すれば、自尊感情に影響を与える要因の同定も有意義であると考えられる。

したがって、本研究では中学校1年生の時の担任教師に対する信頼感が、その後の人格すなわち他者軽視傾向ならびに自尊感情に与える影響について、大学生を対象に回想法を用いて検討する。

方法

調査対象者 大学生 242 名(男性 99 名, 女性 137 名, 不明 6 名; 平均年齢 19.93 歳, $SD = 1.56$)を対象とした。調査は 2019 年 7 月下旬に行った。

材料 本研究では、フェイスシートで年齢と性別を尋ねたほか、以下の尺度への回答を求めた。

生徒の教師に対する信頼感尺度(Students' Trust in Teachers: 以下 STT 尺度) 中学校 1 年生の時の担任教師に対する信頼感を測定するため、中井・庄司(2006)による 31 項目の尺度を用いた。「まったくそう思わない」を 1 点、「非常にそう思う」を 4 点とする 4 件法で評定を求めた。教示文を「あなたが中学 1 年生だったとき、その先生に対してどのように感じていましたか。」とし、回想法により回答を求めた。

他者軽視傾向尺度 調査対象者の現時点の他者軽視傾向を測定するため、Hayamizu et al. (2004)

による尺度を使用した。全 11 項目で構成されており、「全く思わない」を 1 点、「よく思う」を 5 点とする 5 件法で評定を求めた。

自尊感情尺度 調査対象者の現時点の自尊感情を測定するため、山本・松井・山成（1982）による尺度を使用した。全 10 項目で構成されており、「当てはまらない」を 1 点、「当てはまる」を 5 点とする 5 件法で評定を求めた。

上記の他に、いくつかの心理尺度への回答を求めたが、本研究の目的とは異なるため割愛する。

手続き 講義終了後の時間などを使用し、一斉に配布・実施を行い回収した。この際、調査への参加は任意であること、回答しないことによる不利益は生じないこと、答えたくない質問には回答しないで構わないことなどを口頭で説明したほか、質問紙の表紙にも記載し、協力に同意した者のみ回答するよう求めた。説明および回答に要した時間は 15 分程度であった。

結果

本研究における分析には、HAD（清水, 2016）の Version16.302 を用いた。なお、回答に欠損がみられた箇所については、分析ごとにペアワイズ除去を行った。

各尺度の因子構造の検討 本研究で使用した各尺度について、その因子構造の検討を行った。まず STT 尺度について最尤法・Promax 回転による因子分析を行った結果、Table1 に示す 3 因子構造が示された。第 1 因子は「私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する」「私は、先生と話す、気持ち楽になる」など、担任教師に対する安心感に関する項目で構成されており、「担任への安心感」と命名した。第 2 因子は「私がまちがっていたときは、先生なら、きちんと叱ってくれる」「先生は、悪いことは悪いと、はっきり言う」など、担任教師に対して期待する教師役割に関する項目で構成されており、「担任への役割遂行評価」と命名した。第 3 因子は「先生は威張っている」「先生は、自分の考えを押しつけてくる」など、担任教師に対する不信に関する項目で構成されており、「担任への不信」と命名した。これらの下位尺度名は、中井（2015）にならって命名し、それぞれ合算平均値を求めて各下位尺度を構成した。

次に、他者軽視傾向尺度についても最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、Table2 に示す 2 因子構造が示された。第 1 因子は「自分の代わりに大切な役目を任せられるような有能な人は、私の周りに少ない」「他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い」など、自分の身の周りの人を軽視対象とする 8 項目で構成されており、菅原（2005）などを参考に「セケン軽視」と命名した。第 2 因子は「世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない」「世の中には常識のない人が多すぎる」など、第一因子と比してより距離のある人を軽視対象とする 3 項目で構成されており、「タニン軽視」と命名した。その上で、それぞれ合算平均値を求めて各下位尺度を構成した。

また、自尊感情尺度についても最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。このとき、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」という項目はどちらの因子にも十分な負荷量を示していなかったため削除し、再度同様の因子分析を実施した。その結果、Table3 に示す 2 因子構造が示された。第 1 因子は「いろいろな良い素質を持っている」「少なくとも人並みには、価値のある人間で

ある」など、ポジティブな側面に関する6項目で構成されていたことから、「肯定的自己評価」と命名した。第2因子は「自分は全くだめな人間だと思ふことがある」「何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ」など、ネガティブな側面に関する3項目で構成されていたことから、「否定的自己評価」と命名した。それぞれ合算平均値を求めて各下位尺度を構成した。

性差の検討 各尺度の得点について、性差を検討した。まずSTT尺度は、いずれの下位尺度の得点にも有意差は認められなかった ($t_s \leq 1.92, p_s \geq .06$)。次に他者軽視傾向尺度は、セケン軽視の得点に有意差が認められ ($t(197.15) = 3.28, p = .001$)、男性 ($M = 2.66, SD = 0.73$)の方が、女性 ($M = 2.35, SD = 0.69$)より高かった。タニン軽視の得点には有意差は認められなかった ($t(192.01) = 1.29, p = .20$)。最後に自尊感情尺度は、いずれの下位尺度の得点にも有意差は認められなかった ($t_s \leq 1.92, p_s \geq .06$)。一部の尺度得点に性差が認められたため、以降の分析は男女別に行うこととした。

Table1 STT尺度の因子分析結果

項目	因子1	因子2	因子3	h^2
第1因子：担任への安心感 ($\omega = .94$)				
私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する	1.019	-.190	.072	.756
私は、先生と話すとき、気持ちが楽になる	.997	-.094	.086	.798
先生になら、いつでも相談ができる	.777	.113	.021	.712
先生と話していると、困難なことに立ち向かう勇気がわいてくる	.749	.122	.026	.673
私が悩んでいるとき、先生が私を支えてくれている	.699	.137	-.053	.687
将来のことがわからないときは、先生に相談してみようという気になる	.674	.122	.045	.541
先生はいつも私のことを気にかけてくれている	.600	.099	-.096	.532
先生は、私の立場で気持ちを理解してくれている	.482	.068	-.222	.465
先生は、私を大事にしてくれている	.461	.343	-.086	.624
私が失敗したとき、先生なら、私の失敗をかばってくれるだろう	.392	.132	-.166	.364
第2因子：担任への役割遂行評価 ($\omega = .89$)				
私がまちがっていたときは、先生なら、きちんと叱ってくれる	-.094	.771	.026	.489
先生は、悪いことは悪いと、はっきり言う	-.063	.770	.087	.473
先生は、自信を持って指導を行っている	.064	.664	.336	.347
先生には、教育者としての威厳がある	.080	.653	.145	.406
先生には正義感がある	.198	.609	.029	.546
先生は、何事にも一生懸命である	.220	.569	.020	.521
先生は、決まりを守っている	-.145	.556	-.312	.459
先生は、正直だ	.063	.509	-.141	.414
先生は、教師としてたくさんの知識を持っている	.174	.488	-.013	.391
先生は、質問したことには、きちんと答えてくれる	.141	.403	-.260	.479
先生なら、私との約束や秘密を守ってくれそう	.193	.398	-.219	.488
第3因子：担任への不信 ($\omega = .90$)				
先生は威張っている	-.142	.295	.853	.641
先生は、自分の考えを押しつけてくる	-.076	.323	.823	.534
先生は、一部の人を、ひいきしている	.166	.012	.756	.452
先生は、言っていることと、やっていることに矛盾がある	.103	-.229	.695	.607
先生の考え方は否定的だ	-.086	.021	.683	.521
たとえ、まちがっているときでも、先生は自分のまちがいを認めない	-.106	-.023	.658	.541
先生は、自分の機嫌で、態度が変わる	-.121	.087	.641	.444
先生は、一度言ったことを、ころころ変えている	.280	-.347	.602	.472
先生は、他の生徒と私を比べている	.048	.032	.525	.234
先生の性格には、裏表がある	-.130	-.103	.498	.422
	因子間相関		.665	-.557
				-.544

Table2 他者軽視傾向尺度の因子分析結果

項目	因子1	因子2	h^2
第1因子：セケン軽視 ($\omega = .84$)			
自分の代わりに大切な役目をまかせられるような有能な人は、私の周りに少ない	.714	-.080	.458
他の人を見ていて「ダメな人だ」と思うことが多い	.711	-.005	.502
他の人の仕事を見ていると、手際が悪いと感じる	.695	-.167	.394
他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	.679	-.065	.421
自分の周りには気のきかない人が多い	.574	.086	.387
話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	.546	.202	.450
知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	.477	.282	.442
私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	.472	-.027	.211
第2因子：タニン軽視 ($\omega = .58$)			
世の中には、努力しなくても偉くなる人が少なくない	-.147	.705	.414
世の中には常識のない人が多すぎる	.105	.536	.355
今の日本を動かしている人の多くは、たいした人間ではない	-.058	.493	.217
因子間相関		.504	

Table3 自尊感情尺度の因子分析結果

項目	因子1	因子2	h^2
第1因子：肯定的自己評価 ($\omega = .87$)			
いろいろな良い素質を持っている	.965	.160	.763
少なくとも人並みには、価値のある人間である	.816	.053	.614
自分には、自慢できるところがあまりない	-.641	.150	.553
物事を人並みには、うまくやれる	.455	-.140	.307
だいたいにおいて、自分に満足している	.454	-.291	.456
自分に対して肯定的である	.442	-.374	.543
第2因子：否定的自己評価 ($\omega = .83$)			
自分は全くだめな人間だと思うことがある	.169	.943	.718
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	-.083	.780	.695
敗北者だと思うことがよくある	-.206	.517	.443
因子間相関		-.628	

各尺度の相関係数および記述統計量 各尺度の相関係数および記述統計量を Table4 に示す。相関の傾向は男女間で概ね類似しており、次に示す点が共通していた。まず、STT 尺度の下位尺度間の相関（担任への安心感と担任への役割遂行評価との間には正の相関、担任への安心感と担任への不信、担任への役割遂行評価と担任への不信との間には負の相関）が認められた。また、担任への安心感および担任への役割遂行評価は肯定的自己評価と正の相関を示したほか、セケン軽視とタニン軽視との間に正の相関、肯定的自己評価と否定的自己評価との間に負の相関が認められた。

一方、男女間で相関係数のパターンに違いが見られた箇所もあった。まず、男性は担任への安心感と否定的自己評価の間に負の相関、担任への不信と否定的自己評価に正の相関が認められた一方、この傾向は女性にはみられなかった。また、男性は担任への不信と肯定的自己評価との間に負の相関が認められたが、この傾向は女性にはみられなかった。この他、女性においてタニン軽視と否定的自己評価には正の相関が認められたが、この傾向は男性にはみられなかった。

信頼感が他者軽視傾向、自尊感情に及ぼす影響の検討 性差に関する検定結果を踏まえ、STT 尺度の3つの下位尺度の得点を説明変数、他者軽視傾向尺度の2つの下位尺度および自尊感情尺度の2つの下位尺度を目的変数としたパス解析を男女別を実施した。

Table4 各尺度の相関係数および記述統計量

	1	2	3	4	5	6	7	M	SD
1 担任への安心感	—	.77 **	-.50 **	-.03	.01	.28 **	-.25 *	2.54	0.65
2 担任への役割遂行評価	.70 **	—	-.61 **	-.17	-.01	.22 *	-.18	3.10	0.50
3 担任への不信	-.56 **	-.46 **	—	.11	.18	-.23 *	.20 *	2.05	0.57
4 セケン軽視	.08	.03	-.07	—	.35 **	.19	-.04	2.65	0.74
5 タニン軽視	.08	.14	-.08	.33 **	—	-.15	.17	2.88	0.83
6 肯定的自己評価	.21 *	.18 *	.01	.13	-.11	—	-.61 **	3.29	0.77
7 否定的自己評価	-.02	-.01	-.02	.02	.29 **	-.66 **	—	3.01	0.92
	M	2.69	3.21	2.00	2.35	2.74	3.09	3.03	
	SD	0.70	0.49	0.61	0.69	0.78	0.80	0.97	

** $p < .01$, * $p < .05$

注) 右上および右の2列は男性, 左下および下の2行は女性のデータを示す。

Table5 パス解析の結果(男性)

	B	SE	β
目的変数: セケン軽視 ($R^2=.05$)			
担任への安心感	0.30	0.18	.25
担任への役割遂行評価	-0.47	0.26	-.29
担任への不信	0.09	0.16	.07
目的変数: タニン軽視 ($R^2=.05$)			
担任への安心感	0.07	0.20	.05
担任への役割遂行評価	0.12	0.30	.06
担任への不信	0.40	0.18	.26 *
目的変数: 肯定的自己評価 ($R^2=.11$)			
担任への安心感	0.29	0.18	.23
担任への役割遂行評価	0.04	0.27	.03
担任への不信	-0.18	0.17	-.12
目的変数: 否定的自己評価 ($R^2=.07$)			
担任への安心感	-0.38	0.22	-.26 *
担任への役割遂行評価	0.27	0.32	.13
担任への不信	0.24	0.20	.14

* $p < .05$

Table6 パス解析の結果(女性)

	B	SE	β
目的変数: セケン軽視 ($R^2=.01$)			
担任への安心感	0.10	0.13	.10
担任への役割遂行評価	-0.08	0.17	-.05
担任への不信	-0.04	0.12	-.03
目的変数: タニン軽視 ($R^2=.02$)			
担任への安心感	0.08	0.14	.07
担任への役割遂行評価	0.12	0.18	.08
担任への不信	-0.03	0.13	-.02
目的変数: 肯定的自己評価 ($R^2=.07$)			
担任への安心感	0.26	0.15	.22
担任への役割遂行評価	0.19	0.19	.12
担任への不信	0.26	0.13	.20
目的変数: 否定的自己評価 ($R^2=.001$)			
担任への安心感	0.02	0.18	.01
担任への役割遂行評価	-0.08	0.23	-.04
担任への不信	-0.06	0.16	-.04

まず, 男性を対象としたパス解析の結果を Table5 に示した ($\chi^2(4) = 10.63, p = .03, CFI = .96, RMSEA = .13$ [95%CI = .00, .25], GFI=.97)。セケン軽視の得点に対しては, STT 尺度の3つの下位尺度得点の影響はいずれも有意には至らなかった。一方, タニン軽視に対して担任への不信の影響が有意であり, 担任への不信はタニン軽視を促進していた。また, 否定的自己評価に対して担任への安心感の影響が有意であり, 担任への安心感は否定的自己評価を抑制していた。

次に, 女性を対象としたパス解析の結果を Table6 に示した ($\chi^2(3) = 8.58, p = .04, CFI = .98, RMSEA = .12$ [95%CI = .00, .23], GFI=.98)。女性においては, すべての目的変数に対し, STT 尺度の3つの下位尺度得点の影響はいずれも有意には至らなかった。

考察

各尺度の因子構造について 本研究においては、回想法を用いて尋ねた STT 尺度を含め、既存の尺度についても因子分析を行い、その因子構造を検討した。その結果、STT 尺度は先行研究（中井, 2015; 中井・庄司, 2006）と同様の 3 因子構造が示された。一方、他者軽視傾向尺度と自尊感情尺度について 2 因子構造が示された点は、注目に値すると思われる。他者軽視傾向尺度は従来、1 因子性が繰り返し確認されてきたが、速水他（2004）は、尺度の作成にあたり「評価対象となる他者として世間一般の他者を想定した項目を 5 項目、より身近な経験の中での他者を想定した項目を 6 項目用意した (p.3)」と述べており、軽視する他者との距離を反映した 2 因子が抽出されたと考えられる。こうした因子構造が再現されるかを含め、今後の継続した検討が必要と思われる。

次に、自尊感情尺度についても 2 因子構造が示されたが、こうした 2 因子構造はこれまでも確認されている (e.g., 福留他, 2017; 福留・森永, 2018)。福留他（2017）では、確認的因子分析において、ポジティブな自尊感情（本稿における「肯定的自己評価」）とネガティブな自尊感情（本稿における「否定的自己評価」）の 2 因子構造を示した。そして、ネガティブな自尊感情はポジティブな自尊感情よりもストレス反応や敵意と強い相関を示すことを明らかにしている。この他にも、尺度自体は異なるが、自尊感情を測定する尺度に 3 因子構造を見出した研究 (Oie & Fujii, 2017) もあり、こうした点を考慮すれば、今後の研究においても自尊感情が複数の因子から構成される可能性に注目して検討する価値があると思われる。

信頼感が他者軽視傾向、自尊感情に及ぼす影響の検討 本研究の主たる目的である、信頼感が他者軽視傾向ならびに自尊感情に及ぼす影響を検討するにあたり、事前に各尺度得点の性差を確認した。その結果、他者軽視傾向尺度の下位尺度であるセケン軽視の得点に性差が認められた。男性の方が女性より他者軽視傾向が高いことは、先行研究においても示されている (e.g., 藤井, 2013b)。こうした結果を踏まえ、男女別に影響過程の検討を行ったところ、信頼感が他者軽視傾向、自尊感情に及ぼす影響は男女別に異なっていた。

まず男性においては、タニン軽視に対して、担任への不信が促進効果を持っていた。このことから、担任に対して「威張っている」「自分の考えを押しつけてくる」「裏表がある」といった不信感を抱くことは、「世の中には常識のない人が多すぎる」といった、身近な他者ではなく、より距離のある「セケン」の人たちへの軽視を強めることを示している。一方で、担任への安心感は、否定的自己評価を低減させる効果を持っていた。担任が困ったときに相談できる、話を聞いてくれる存在であったという安心感は、その後の適応にもよい影響を示すと言えるだろう。

こうした結果は、中学校における担任教師の働きかけが、大学生になった後の他者軽視傾向や自尊感情に影響を与えるということを示した点で有意義であると考えられる。他者軽視傾向や自尊感情の一側面に対してではあるが、中学校 1 年生の担任教師の信頼感が、その規定因になっていることが示唆された。

一方で、女性においては、中学 1 年生の担任教師に対する信頼感が他者軽視傾向や自尊感情に及ぼす影響は観察されなかった。少なくとも本研究のデータにおいて、大学生になった後の女性の他

者軽視傾向や自尊感情には、中学1年生の担任教師への信頼感の影響はみられなかったと言えるが、本研究には以下に述べるとおり課題も複数残されており、そうした点を克服した上で再度検討することが望まれる。

本研究における課題 本研究では、少なくとも3点の課題を残していると考えられる。1点目は想起対象として中学1年生の時の担任教師を指定したことである。この理由は、「中学校の時の先生」という曖昧な指定をした場合、調査対象者によって想起する対象が異なり、それが分析の上で影響を及ぼすと判断したためであった。ただし、中学校では小学校と異なり教科担任制となることから、関わりの深い (i.e., 影響力の大きい) 教師は必ずしも学級担任とは限らず、生徒ごとに異なることも考えられる。そういった点では、進路指導などで向き合う機会が多く、記憶も新しい中学3年生の担任を想起対象とするといった方法もあり得たかもしれない。

2点目は、信頼感を検討する特定の他者として教師を挙げたことである。自我の確立や対人的信頼感の発達には、教師のみならず家族や友人との関係性も大きく関わってくると考えられる。たとえば、幼少期における両親からのソーシャルサポートが、大学生になった後の精神的回復力に及ぼす影響を検討した東 (2018) では、両親からのソーシャルサポートから精神的回復力への影響は女性においてのみ認められた。男性ではこうした影響過程はみられず、男性の場合は友人や教師など、両親以外の他者から受ける影響が大きいためではないか、と考察されている。特に中学生や高校生になると、友人との関係性が大きな影響をもつとも考えられることから、特定の他者として教師のみならず、友人などを取り上げて検討することも必要と考えられる。また、本研究では担任教師の性別を尋ねておらず、担任教師が調査対象者にとって同性・異性どちらであったかを含めた検討はできていない。こうした点も今後の課題と言える。

3点目に、測定に用いる尺度についてである。本研究で使用した他者軽視傾向尺度や自尊感情尺度は、社会的望ましき反応尺度との相関がしばしば指摘されている。たとえば、他者軽視傾向尺度は社会的望ましき反応尺度 (谷, 2008) の印象操作と負の相関を示す (i.e., 自分をよく見せようとする動機が高いほど、他者軽視傾向を低く報告する) (藤井他, 2010)。また、自尊感情は社会的望ましき反応尺度における自己欺瞞と正の相関を示す (i.e., 自分自身に対する自己評価が過度に高いほど、自尊感情を高く報告する) (藤井他, 2010; 谷, 2008)。こうした点を踏まえれば、社会的望ましき反応尺度を並行して実施し、その影響を取り除くか、Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) などの潜在的測度を用いた測定も一考に値すると思われる。

上記のような課題は残っているものの、本研究では中学校1年生の担任教師に対する信頼感が、その後の他者軽視傾向や自尊感情に影響する可能性を示すことができた。今後は上記の課題を踏まえた上で、さらなる検討が望まれる。

引用文献

- 藤井 勉 (2013a). 対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討 パーソナリティ研究, 22, 23–36.
 藤井 勉 (2013b). 青年期における有能感の4類型と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 人文科

學研究, 31, 206–220.

藤井 勉 (2014a). 他者軽視傾向との関連から見た遂行接近目標 人文, 12, 119–130.

藤井 勉 (2014b). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, 85, 93–99.

藤井 勉・上淵 寿・利根川 明子・上淵 真理江・山田 琴乃 (2010). 他者軽視傾向と社会的望ましさの関連 日本パーソナリティ心理学会第 19 回大会発表論文集, 67.

藤井 勉・山本 政人・伊藤 忠弘 (2013). Twitter における不適応的な「つぶやき」の要因——パーソナリティ特性からの検討—— 学習院大学計算機センター研究年報, 34, 40–55.

福留 広大・藤田 尚文・戸谷 彰宏・小林 渚・古川 善也・森永 康子 (2017). 中学生におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の 2 側面——「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」—— 教育心理学研究, 65, 183–196.

福留 広大・森永 康子 (2018). 自尊感情の 2 因子と 2 種類の自己愛の関連性 広島大学心理学研究, 18, 107–126.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464–1480.

速水 敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち 講談社

Hayamizu, T., Kino, K., Takagi, K., & Tan, E. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determinant of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, 5, 127–135.

速水 敏彦・木野 和代・高木 邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討 名古屋大学教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 51, 1–8.

速水敏彦・木野和代・高木邦子 (2005). 他者軽視に基づく仮想的有能感——自尊感情との比較から—— 感情心理学研究, 12, 43–55.

東 恵梨子 (2018). 幼少期の家族関係が青年期の精神的回復力に及ぼす影響 平成 29 年度鹿児島大学教育学部卒業論文 (未公刊)

稲垣(藤井) 勉・大浦 真一・松尾 和弥・島 義弘・福井 義一 (2017). 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自殺念慮との関連 日本感情心理学会第 25 回大会発表論文集, PS13.

稲垣 勉・澄川 采加 (2019). 良性・悪性妬み傾向と自尊感情, 他者軽視傾向の関係 日本社会心理学会第 60 回大会発表論文集, 303.

伊藤 正哉・小玉 正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74–85.

小平 英志・小塩 真司・速水 敏彦 (2007). 仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験——抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して—— パーソナリティ研究, 15, 217–227.

松本 麻友子・速水 敏彦・山本 将士 (2013). 高校生における仮想的有能感と対人関係との関連——

仮想的有能感の変動に影響を及ぼす要因の検討—— パーソナリティ研究, 22, 87–90.

松本 麻友子・山本 将士・速水 敏彦 (2009). 高校生における仮想的有能感といじめの関連 教育心理学研究, 57, 432–441.

三浦 潤子 (2003). 養育行動と学校環境適応感の関連についての検討——内的作業モデルの伝達を通して—— 臨床教育心理学研究, 29, 9–19.

永作 稔・新井 邦二郎 (2006). 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, 53, 516–528.

中井 大介 (2015). 教師との関係の形成・維持に対する動機づけと担任教師に対する信頼感の関連 教育心理学研究, 63, 359–371.

中井 大介・庄司 一子 (2006). 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, 54, 453–463.

中井 大介・庄司 一子 (2008). 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, 19, 57–68.

Oie, M., & Fujii, T. (2017). Development of Children's Self-esteem at the Elementary School and School Adjustment. *Hitotsubashi review of arts and sciences*, 11, 21–36.

小塩 真司・西野 拓朗・速水 敏彦 (2009). 潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 17, 250–260.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

島 義弘 (2012). アタッチメントの内的作業モデルと仮想的有能感の関連 パーソナリティ研究, 21, 176–182.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59–73.

菅原 健介 (2005). 羞恥心はどこへ消えた? 光文社

澄川 采加・稲垣 勉・島 義弘 (2020). 仮想的有能感と自己愛——両者を構成する要素と他の諸変数との関連—— 日本感情心理学会第28回大会発表論文集, PS0025.

谷 伊織 (2008). バランス型社会的望ましさを反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, 17, 18–28.

山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64–68.

付記

本論文は、第1著者の指導および第2著者の助言の下で、前園奈々帆さんが令和元年度に鹿児島大学教育学部に提出した卒業論文を、第1著者と第2著者が再分析を行って再構成したものです。調査にご協力いただいた学生の皆様に心からお礼を申し上げます。